

9 フロックコート

明治時代

墨コレクション目録Ⅲ 24

本資料は明治天皇の着用品。皇室の紋である「十六八重表菊紋」の施された桐箱、ロンドン「TRESS」社製のシルクハットが付属する。

天皇の正装としては、明治5年(1872)に文官的な天皇正服が、明治6年に大元帥としての軍服風の御服が作製されたが、略装としてはこのようなフロックコートが用いられた。

10 モーニングコート

明治・大正時代

墨コレクション目録Ⅲ 32

大正頃からフロックコートに代わって、昼間の礼服としてはモーニングコートが着用されるようになった。下には縦縞のズボンを合わせる。

本資料は大正天皇の着用品で、侍従を務めた河緒実英(1888～1983)が拝領したもの。実英は、明治政府で太政大臣を務めた三条実美の四男で、服飾史や有職故実の研究者でもあった。

参考文献

臼井勝美・高村直助・鳥海靖・由井正臣(編)『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2001

刑部芳則『洋服・散髪・脱刀 服制の明治維新』講談社、2010

刑部芳則『明治国家の服制と華族』吉川弘文館、2012

刑部芳則『帝国日本の大礼服 国家権威の表象』法政大学出版局、2016

北村恒信(編)『陸海軍服装総集図典一軍人・軍属制服、天皇御服の変遷一』国書刊行会、1996

福川秀樹『日本海軍将官辞典』芙蓉書房出版、2000

福川秀樹『日本陸軍将官辞典』芙蓉書房出版、2001

藤田昌雄『写真で見る明治の軍装』潮書房光人社、2016

藤田昌雄『写真で見る大正の軍装』潮書房光人社、2017

柳生悦子『日本海軍軍装図鑑 幕末・明治から太平洋戦争まで』並木書房、2003

『日本の男服 メンズ・ファッションの源泉』図録、神戸ファッション美術館、2013

『企画展 近代の洋装と毛織物～文明開化のコスチューム』展示解説書、一宮市博物館、2013

『一宮市博物館所蔵品目録 墨コレクションⅢ 洋装編』一宮市博物館、2014

「平成27年度企画展 明治天皇の侍医頭 岡玄卿」、『一滴』第24号、津山洋学資料館、2017

【凡例】

本出品目録には、一宮市博物館常設展示室2-3において、平成30年6月5日～8月12日の間に行った特集展示「墨コレクション 近代の洋装」の展示資料全10点について、出品番号、資料名、時代、『一宮市博物館所蔵品目録 墨コレクションⅢ 洋装編』の収録番号、作品解説を掲載した。作品解説及びその他の解説は当館学芸員・成河端子が執筆した。
※本展示は、平成30年9月30日までの予定であったが、やむを得ない事情により、終了日を8月12日に変更した。

【正誤表】

3 陸軍将校正装(主計中将)

(誤)石川半三郎(1855～1968) (正)石川半三郎(**1885**～1968)

本出品目録の初版には上記の誤りがありました。お詫びするとともに、訂正いたします。



一宮市博物館
ICHINOMIYA CITY MUSEUM

平成30年度特集展示「墨コレクション 近代の洋装」出品目録

平成30年6月5日発行 平成30年6月30日改訂 平成30年8月15日再改訂

編集・発行■一宮市博物館（一宮市大和町妙興寺2390 TEL 0586-46-3215）

一宮市博物館 特集展示

墨コレクション 近代の洋装

平成30年6月5日 火 ▶ 8月12日 日

現在、当たり前のように着ている洋服。西洋起源の洋服を日本人が広く着るようになったのは、明治時代になってからのことです。そこには、江戸時代の鎖国が終焉を迎え、諸外国との外交に取り組まなければならなかった、明治新政府の思惑がありました。

このたびの特集展示では、当館が所蔵する墨コレクションの中から10点を展示し、日本で洋服が着用されるようになった頃の洋装を紹介します。政府高官の大礼服や陸海軍の軍服など、日本で洋服が最初に採り入れられたのは、このような制服からでした。どのような形の服で、どのように着用し、どんな時に用いるのか、非常に細かな規則がありました。このような規則を遵守し、新しい洋服を着こなすことが、エリートの証左であり、また諸外国に恥じない文明国であることのアピールにもなったのです。

今回は、衣服の制度に加え、着用者が分かるものについては、その人物のプロフィールを添えしました。展示資料をご覧いただきながら、かつて着用していた偉人たちの面影に想いを馳せていただければ幸いです。

すみ 墨コレクション

毛織物の染色整理加工業を営んでいた艶金興業株式会社の3代目社長・墨敏夫氏が収集したもので、約530点にのぼる全国有数の毛織物コレクションです。

昭和35年(1960)、兼ねてから毛織物資料館設立の構想を温めていた敏夫氏は、志を同じくするフォーマルウェアメーカーの株式会社渡喜(現カインドウェア)社長・渡邊国雄氏に促され、毛織物資料の収集に乗り出します。昭和39年11月に敏夫氏が設立した、墨毛織物資料館(仮称)設立準備委員会の趣意書には、戦争の被害や虫害などのために損耗甚だしい古い毛織物資料を収集し、保管を完全にして後世に伝え、広く研究者や一般の方の参考に供したいと収集の企図を述べています。

準備委員会には、渡辺社長以外に、東京国立博物館技官(当時)の佐藤貫一、山辺知行、今永清士各氏が名を連ね、専門研究者の協力を仰ぎながら資料収集を進めていた様子がうかがわれます。江戸時代の陣羽織や火事装束、近代の大礼服・軍服など、染織史や服飾史の面から貴重な資料を含んだこれらの収集品は、墨総合研究所資料室に長らく保管されていましたが、一宮市では平成22年度(2010)にこれを一括購入しました。広く一般公開をとという敏夫氏の遺志を受け、全4冊からなる所蔵品目録を刊行し、展覧会や常設展示室の特集展示などで順次公開しています。

りくぐん ぐんぶく
陸軍の軍服

ばくまつ いこう にほん せいようれっきょう ぐんじりよく たいこう きんだいてき ぐんたい そしき どうにゆう
幕末以降の日本では、西洋列強の軍勢力に対抗するため、近代的な軍隊組織が導入され、そこでは
せいようしき ちゃくよう めいじ ねん がつ せいふ りくかいぐん せいてい
西洋式の軍服が着用されました。明治 3 年(1871)12 月、明治政府は陸海軍の軍服を制定し、陸軍は
フランス式、海軍はイギリス式のものになりました。その後、明治 19 年の改正で、普仏戦争に勝利し
たドイツ式の軍制を採用するにあたり、軍服もドイツ式に変更されました。服の素材は初め濃紺の
ウールでしたが、明治 37 年～38 年の日露戦争にあたり、戦時服制として服の色が濃紺からカーキ
色に変更され、明治 39 年には正式にカーキ色になりました。

へいか ていしよく
陸軍兵科の定色

しょうかん 将官	なし	ほうへい 砲兵	き 黄	こうくうへい 航空兵	たんこんじょう 淡紺青
ほへい 歩兵	ひ 緋	こうへい 工兵	しろ 白	けんへい 憲兵	ひ 緋
ぎへい 騎兵	もえぎ 萌黄	しちょうへい 輜重兵	むらさき 紫	ぐんがくへい 軍楽兵	こんじょう 紺青

せいけんしょう せいそう かた きしょう
正肩章 …正装の肩につける徽章(しるし)

たいしょう 大將		たいさ 大佐		たいい 大尉	
ちゅうじょう 中將		ちゅうさ 中佐		ちゅうい 中尉	
しょうしょう 少將		しょうさ 少佐		しょうい 少尉	
				じゅんい 准尉	
				じゅんしかん 准士官	

ふくそう み へいか かいきゅう わ
服装をただけで兵科・階級がすぐに分かるようになっています。

りくぐんしょうこう せいそう たいしょう しょうわ じだい
1 陸軍将校正装(大將) 昭和時代

ほんしりょう りくぐんたいしょう にしお としぞう ちゃくようひん きゅうにほん にんかん もの めい
本資料は陸軍大將・西尾寿造の着用品。旧日本陸軍において大將に任官された者はわずか 134 名
であるため、大將の軍服は絶対数が少なく、大変貴重である。
えりしょう そでしょう そでさがわ み きつこうもよう きんせん しょうかん もち けんしょう ほし
襟章および袖章の袖先側に見える亀甲模様の金線は将官のみに用いられるもの。肩章の星 3 つ、
袖章の 7 条の金線は大將を示す。

ぶんかん たいれいふく ちよくにんかん めいじ たいしょう じだい
7 文官大礼服(勅任官) 明治・大正時代

ほんしりょう てんのう じいのかみ つと おかげんきょう ちゃくようひん せいてい
本資料は明治天皇の侍医頭を務めた岡玄卿の着用品。明治 4 年(1871)に制定された文官大礼服は、
明治 19 年(1886)12 月に改正された。本資料は、大振りな五七の桐の文様、袖先まである幅広の袖飾
りなどから、明治 19 年の改正以後のものであることが分かる。

くないかん たいれいふく ちよくにんかん めいじ たいしょう じだい
8 宮内官大礼服(勅任官) 明治・大正時代

ほんしりょう おかげんきょう ちゃくようひん きゅうていふく なら けいしき きくもんよう
本資料は資料 7 と同じく岡玄卿の着用品。プロイセンの宮廷服に倣ったガウン形式で、菊文様を
はい 配する。明治 17 年(1884)、宮内省侍従職・式部職には、他の文官と異なる大礼服が制定されたが、
きゅうちゅう こくせい ば くべつ き と くないきょう いたう ひろぶみ いこう はんえい かんが
これは宮中と国政の場の区別を企図した宮内卿・伊藤博文の意向の反映と考えられている。

おか げんきょう かえい ねん たいしょう
岡 玄卿 嘉永 5 年(1852)～大正 14 年(1925)

みまさかのくに げんざい おかやまけん ほうとうぶ つやま はんし ちょうなん おおさか くらやしき う めいじ
美作国（現在の岡山県北東部）津山藩士の長男として大坂蔵屋敷で生まれたとされる。明治 9 年
(1876)に東京医学校（東京大学医学部の前身）を第 1 期生として首席で卒業。同大の助教、助教授、
教授、大学医院内科部長などを歴任。明治 17 年に宮内省より侍医を拝命。明治 22 年に在官のまま
ドイツ・ウィーン大学に私費留学し、2 年後に帰国、職務に復帰して 47 歳で侍医局長となる。明治
40 年、日露戦争の医勲により男爵位を授爵。明治 41 年宮内省の官制改革により侍医頭となり、明治
45 年の明治天皇崩御に立ち会った。



大礼服姿の岡玄卿

津山洋学資料館寄託・岡家資料

たいれいふく

大礼服

明治維新の後、天皇を元首とする新たな政府が樹立されました。それまでは公家は衣冠や狩衣、武士は袴など、身分によって服制が異なっていました。そのため、様々な身分の人々によって成立して

いた明治政府には、公の場での服制を統一する必要がありました。新しい服制に洋装を採用するの

には反対も根強くありましたが、明治 4 年(1871)9 月 4 日、特に洋装への抵抗が激しかった華族に
対して「服制変革内勅」が出され、筒袖・細袴の洋服は神武天皇の頃の服装に似ており、古代官服へ

と復古するべきだという論理によって、洋装化への道筋がつけられました。

洋式の大礼服制の考案には、フランスの服制が参考にされました。明治 5 年 11 月 12 日の太政官
布告によって、文官と非役有位者の大礼服を含む服制が規定されました。現在、この 11 月 12 日は

「洋服記念日」となっています。その後、明治 6 年 2 月 20 日には皇族の大礼服が、明治 17 年には有
爵者大礼服と宮内官大礼服が制定されました。これらは、随所に桐唐草や菊といった、日本の伝統的

な文様が用いられています。

大礼服は新年朝拝・外国公使参朝などの特別の儀礼、小礼服は参賀・礼服御用召並びに叙任御礼

の時に用いられました。また、燕尾服は大礼服が制定されていない一般の人々の通常礼服とされま
した。燕尾服は本来西洋では夜間の礼装ですが、この規定によって日本では昼間に着用されること

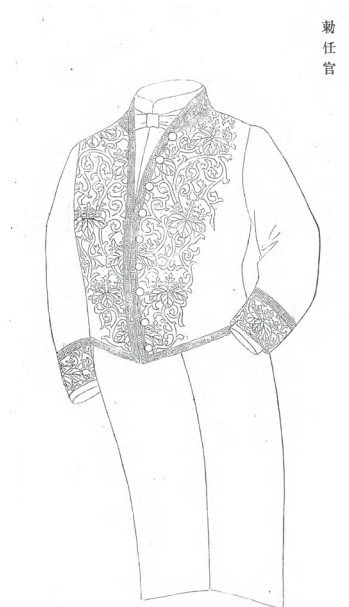
もあります。

ぶんかん たいれいふく ちょくにんかん
文官大礼服(勅任官)



太政官布告第 339 号
明治 5 年 (1872)11 月 12 日
『法令全書』明治 5 年

ぶんかん たいれいふく ちょくにんかん
文官大礼服(勅任官)



宮内省達第 15 号
明治 19 年 (1886)12 月 4 日
『官報 第 1030 号』
明治 19 年 12 月 4 日

くないかん たいれいふく ちょくにんかん
宮内官大礼服(勅任官)



太政官達第 91 号
明治 17 年 (1884)10 月 29 日
『官報 第 402 号』
明治 17 年 10 月 29 日

2 陸軍将校正装(歩兵・大佐)

本資料は西尾寿造の大佐時代 (大正 12 年・1923 ～昭和 4 年・1929) の着用品。西尾は、明治 45

年(1912)から大正 3 年まで、軍事研究のためにドイツに駐在したが、本資料とともに伝わる刀は、
刀身の刻銘によれば、陸軍省軍事課長及び課員一同から西尾へ餞別に贈られたものである。

西尾 寿造 明治 14 年(1881)～昭和 35 年(1960) 陸軍大将：昭和 14 年 8 月～

鳥取県出身。厳正で寡黙な人柄で知られ、「沈黙將軍」などと称された。

日露戦争に出征して負傷。昭和 14 年大将に昇り、初代支那派遣軍総司令官に任官。予備役に編入
後の昭和 19 年より東京都長官を務めた。大戦後は A 級戦犯容疑者として逮捕され、昭和 23 年 12
月まで拘留された。

3 陸軍将校正装(主計中将)

本資料は、兵庫県出身で、昭和 13 年(1938)3 月 1 日に陸軍

主計中将に任官した、石川半三郎(1885～1968)の着用品。主計
とは経理を担う職。銀茶の経理部の定色が袴の側章に見られる。
上衣内側には、陸軍の互助組織「偕行社」製を示すタグがある。



4 陸軍下士兵卒正装(騎兵・一等兵卒)

前開きは隠しフックで留めるが、胸に肋骨のような装飾が付属する。この肋骨式胸飾は、フランス
陸軍の軍服に倣ったもの。騎兵及び近衛騎兵の下士兵卒は、茜色のウール地に、騎兵科の定色である
萌黄色の側章を入れた袴(ズボン)を着用した。襟にも萌黄色が用いられている。

5 陸軍下士兵卒正装(近衛騎兵・曹長)

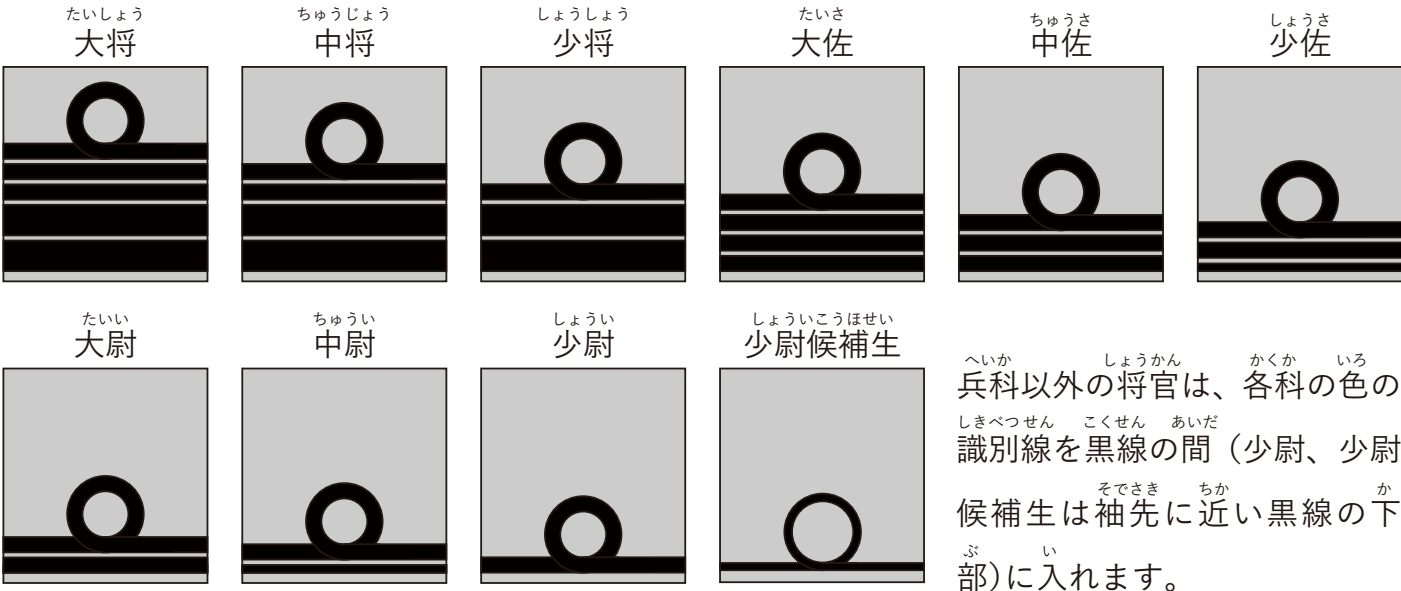
皇居の守護及び儀仗(儀式)の任に当たる近衛師団の正衣。一般兵卒用とは、飾り紐の色などが異
なる。近衛師団の中でも騎兵は儀仗兵としての役割が強かったため、一般騎兵の肋骨服が廃止され
た後も、華美な肋骨服が供奉服として存続した。近衛騎兵は人数が少なく、本資料は稀少。

海軍の軍服

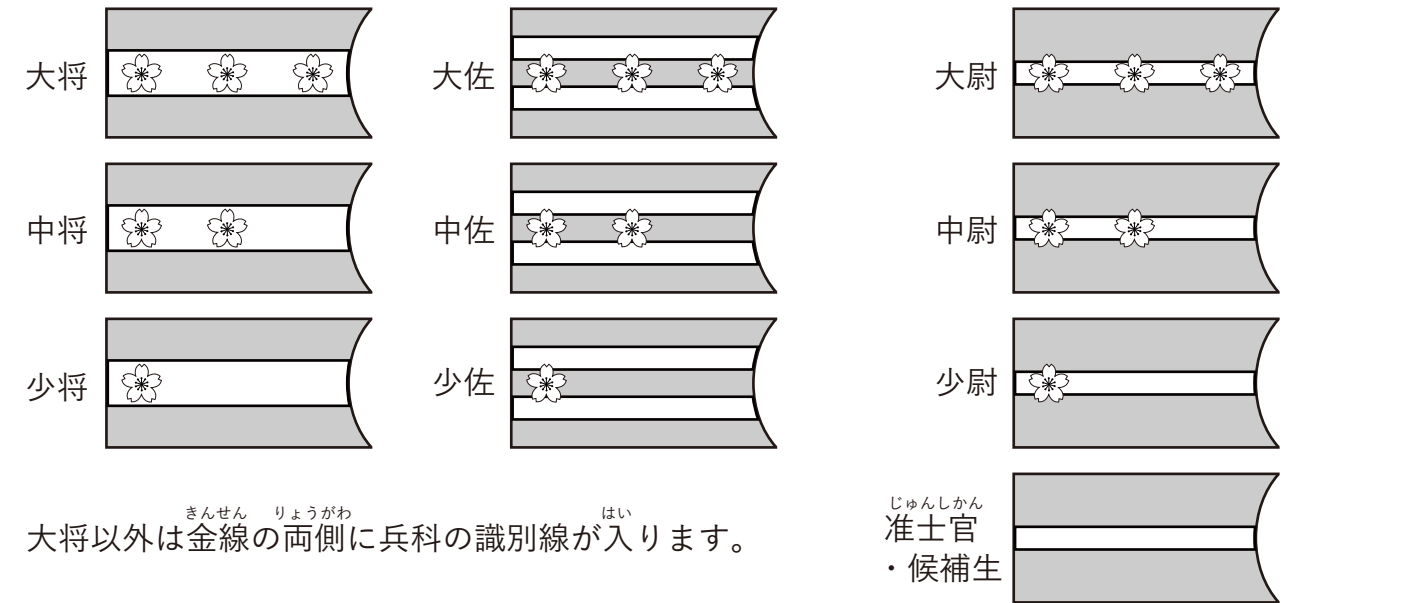
明治 2 年(1869)、山形有朋、西郷従道らは各国の軍事制度を調査するためにヨーロッパに渡りました。帰国後、陸軍はフランス式、海軍はイギリス式が優れていると建言し、明治 3 年にそれぞれ正式採用されました。

海軍の服装は、正装、礼装、通常礼装、軍装、略装の 5 種類に区分されています(大正 3 年[1914] 2 月 27 日制定時)。軍装は、戦時出征、平時衛戍、行軍野営演習などの際に着用するもので、第一種と第二種があります。第一種は冬服で、軍帽、軍衣、軍袴、剣帯、短剣、半靴を着用します。第二種は夏服で、夏衣、夏袴を着用します。軍装を着用すべき時以外の一般の公務時には略装を着用します。

海軍将校軍衣袖章



海軍将校軍衣襟章



6 海軍第一種軍装(大將) 昭和時代

墨コレクション目録Ⅲ 110

本資料は海軍大将・末次信正の着用品。軍服の様式は、当時海軍大国として知られたイギリスに倣ったもの。ボタンや軍帽の帽章などには、錨に桜花の日本海軍の徽章が見える。

現在の学ランの形に似ているが、これは明治 12 年に学習院が海軍式を採り入れた学校制服を制定し、以後詰襟の男子学生服が広く普及したことによる。

末次 信正 明治 13 年(1880)～昭和 19 年(1944) 海軍大将：昭和 9 年 3 月 30 日～

山口県出身。日本海軍における戦術の理論家として知られる。大正 10～11 年(1921～1922) のワシントン海軍軍縮会議に次席随員として、昭和 5 年のロンドン海軍軍縮会議に全権随員として参加した。時の内閣は財政難から国際協調を重視し、戦艦等の保有数を削減する条約に調印したが、末次はこれに徹底して反対し、海軍内部の艦隊派と呼ばれるグループの中心をなした。昭和 12 年の第一次近衛文磨内閣に内閣参議として参画、後に同内閣の内務大臣をも務めた。



海軍第 1 種軍装を着た末次信正(中央) 遺族写真提供